書評

能はいかに読まれるべきか

――三宅晶子著『世阿弥は天才である』を読んで――

天野文雄

三宅さん、しばらくお会いしていませんが、お元気のことと思います。この一年は勤務先が変わって、いろいろたいへんだったのではないかと思います。転居もされたようですね。それにはじめての著書も出したのですから、ずいぶんこと多き年だったことになります。このたびの本は評判がいいようですね。新聞には堂本正樹さんや山折哲雄さんなどの書評が出たと聞きました。これらは関西版には載らなかったのか、残念ながら私は読んでいません。私が読んだのは『能楽ジャーナル』の小林保治さんの書評と『能楽タイムズ』の岡本章さんの書評ですが、ともに高い評価が与えられていました。私はと言えば、昨年の秋に本を送っていただきながら礼状を出さずにいて、昨年の暮の表先生の角川賞の授賞式でお会いして恥ずかしい思いをしました。ほんとうに失礼しました。いただいてすぐにザッと目を通してはいたのですが、ここにきて年度末の校務も一段落してようやく読むことができましたので、お詫びもかねておくればせながらすこし感想を綴ることにしました。もっとも、感想とは言っても、そういろいろのことを綴るつもりはありません。と言うより、本を読んで私が考えさせられたこと、そして三宅さんともぜひ話しをしてみたいと思ったことは、やや誇張して言えば、ひとつしかありません。それは能の読み方ということです。こう言うと、三宅さんは戸惑いをおぼえるかも知れません。こんどの本はそうしたことを目的に書かれたものではないのですから、それは当然のことだと思います。けれども、私はあえてこのたびの本については、本全体の評ではなく、その背後にほんのすこしばかりみえる能の読み方について感想を述べてみたいと思うのです。それはなによりも私自身が抱えている課題だからですが、もうすこし大げさに言えば、今後の能楽研究にもかかわることがらだと思うからです。

この十数年、私はもっぱら能の歴史的研究方面の論文ばかり書いてきましたが、そのかたわら作品研究にも常に関心を持ってきました。作品研究は能の研究をはじめたころにもすこし手がけていますが、それは典拠研究が主体で、作品研究と呼ぶにはいささか視点が偏狭でしたから、もうすこし作品研究と呼べるようなものを書いてみたいという希望を持っていたからです。いつだったか、勤務先で出している大学紹介の自己紹介欄に、作品研究は定年後に老後の楽しみとして取っておきたいというようなことを書いたことがあります。それは半分は冗談でしたが半分は本音でした。作品研究と呼ぶにふさわしいものを私が書けるとしたら、まだそれくらいの時間が必要だと思ったからです。能の読み方という問題は、そんなことを考えている過程でしだいに強く意識されてきたことで、それについてはすこし文章にしたことがあります。二年前に研究室で発行している『まくあい』という劇評誌に載せ

た「能は物語か―京・大阪の二公演から―」という小文がそれです。これは三宅さんは見ておられないかも知れませんね。そこでは馬場あき子さんが大槻能楽堂で行った講演などから、現代においてはどうも能は物語―筋というほどの意味です―を中心に理解されているらしいこと、それは能楽愛好者だけでなく、能の研究者や能評家にも認められる傾向だ、という意味のことを書いています。私は最近の『文学・語学』の平成六年の能楽研究の展望でも、「研究者や能楽愛好者の多くが作品の肝要の部分とは別のところで能を理解するという状況を招来している、と評者には思われる」などと書いています。つまり、現在はどうも能の読み方についての基準がまだ確立されていないのではないか、ということなのです。それは換言すれば、個々の能がそれぞれどのような作られ方をして、どのようなことをねらいとしているのか、というきわめて基礎的な問題についての共通理解がまだ生まれていない、ということです。さらに言えば、個々の能の魅力、それをふまえての能の魅力あるいは能の本質が基礎的なところでまだ理解されていない、ということです。個々の作品の奥の深さとか作品としての質の高さの解明といったレベルの問題は、今後半永久的に続く研究者の仕事でしょうが、もっと基本的なレベルでの個々の能あるいは能そのものの魅力や本質についての共通理解の形成が必要だということです。もちろん、こんなことは口うるさい横町のご隠居の繰り言のようにブツブツ言うより、私自身がさっさと研究として実践すればいいことなのですが、まだ力不足でそれができません。そんなことを考えているうちに、三宅さんの本に接したのです。

たとえば、このたびの本では《井筒》についてはシテの紀有常の女を「毅い女」として、「相手に何も求めず、相手を頼らない。世阿弥は『伊勢物語』を基にしながら、そこに登場する女からはうかがい知ることのできない、はるかに自由で毅い、大した女を作り出しているのである」と書かれていますね。また、こうした理解を受けて《松風》の項では、「井筒の女が、業平への移り舞という行為の中に想いを封じ込め、内へ内へと気持が向かっているのに対して、松風はほとばしる恋情に身をまかせて、心は内から溢れ出る想いに押されるように、外へ外へと向かっていく」とあり、さらに《砧》の項では、「世阿弥はどちらかというと行動的できっぱりした強い女を好むのではないだろうか。松風も物狂の狂女たちも、愛する者への想いに狂乱できる行動力と強さを兼ね備えている。自分の世界に迷いがない。相手を求め真っ直ぐに向かって行くのである。そういう数々の女を作り出す一方で、もはや相手を必要としないまでに自己完結している井筒の女を作ったのだが、またもう一つ別の女の姿がある。それが砧の女である。彼女は自分の想いに狂うことができなかった。相手を求めて、物狂になってでも夫のもとへ出かければよかったのに、それはできない。かといって相手を許し相手を信じ、ひたすら愛し続けることもできなかった」と書かれています。もうひとつ《求塚》からも引用させてもらいます。「好きな人を選べない、人生を選べないなどという消極的な人間を、中世の人、特に世阿弥は容赦しないのである。世阿弥の作り出した一連の女人像を眺めてみると、

それが納得できる。物狂の女たちは、大切な人を探すために、自らの安全性など考慮に入れず、積極的に行動するし、〈松風・井筒・砧〉の女たちは、自らの恋の想いから目を反らすことなく、少しのごまかしもなく、純粋に自分の世界に生きている。そういう女たちは、皆一途で、一種強靭な精神力を持たされ、美しく造形されている。〈求塚〉は女が地獄で責められるところを見せるために作られた能である。女は地獄に堕とすべく意図して選ばれているのであり、世阿弥の場合、こういう自分の人生に対して消極的な生き方をする女は、苦しめたくなるのではなかろうか。〈綾鼓・恋重荷〉の女御などもその好例である」。

断章取義におちいることをおそれ、すこし多めに引用させてもらいました。これらは世阿弥の能に対する三宅さんの基本的な理解だと私は思うのですが、こういう記述に出会うたびに、私は能はいかに読まれるべきかを改めて考えさせられたのです。こうした見方に対する私の感想は二つあります。一つは、ここにはたしかに三宅さんの一貫した主張は認められますが、そもそもそのようなことを世阿弥はそれぞれの能のなかで主張しているのか、という素朴な、しかし基本的な疑問です。これはもちろん作品解釈の問題ですが、そうは読めないのではないかというのが私見です。こんな断定的な言い方ははなはだ乱暴で失礼だとは思いますが、反論はまたお会いしたときにでも受けることとして、いまはそういう純粋な作品解釈上の感想を述べておくだけにします。

もう一つの感想は、能を解釈する場合の姿勢というか、基本的な方法についてです。能、とりわけ世阿弥の能などを解釈する場合に、その主人公について、たとえば「愛する者への想いに狂乱できる強さと行動力」というような理解の仕方はそもそも的はずれなのではないかと私は思うのです。いま掲げた箇所はだいだいそういう視点からのものですが、これは要するに人物論ですね。こうした人物論的視点は研究者をはじめかなり広範に認められますが、能をそのような視点で理解することは根本的に的はずれなのではないか、という疑問です。これは能を物語として筋中心に理解しようとする姿勢とふかくかかわる現象だと私は思うのです。かつて、中世の説話文学の研究者から、授業で能をあつかったが、どう教えてよいかわからず苦労した、ということを聞いたことがあります。じつは私もかなり長いことそういう思いをしてきましたが、それは物語とか説話という視点から能を理解しようとしたためではないかと思います。能には素材となっている物語以外にも重要な要素がたくさんあります。三宅さんが取りくんできた修辞ももちろんそのひとつですし、場面ごとに凝らされた構成・演出・音楽上の趣向などもそうです。ひとつの能のねらい・魅力は、作者がそうしてはりめぐらしたもろもろの趣向を総合的に把握することによって理解されるものでしょう。換言すれば、一曲のねらい・魅力を理解する方法はそれしかないと思うのです。もちろん、こんなことは演劇研究・文学研究として当たり前のことなのですが、能については不思議にそれがなされてない。その理由はやはり台本が正確に読まれていない、ということだろうと思います。これは三宅さんのことを言っているのではなく、能楽研究全体がそういう傾向にあると思うのです。そうしたなかにあって、

三宅さんは修辞の分析などを中心に正統的な方法で作品研究を進めてきたと私は理解しているのですが、それがここに来て突然このような人物論が開陳されたのですから驚きました。そこに私は能の読み方についての現代の通弊が影を落としていると思ったのです。私は、能のねらい・魅力を人物論的な視点でとらえようとするのはやはり的はずれだと思います。むしろ、能は人物論を展開するにはもっとも不適当な素材なのではないでしょうか。

はなはだ断片的な感想を二つ記しましたが、もちろんこの二つのことは同じことであります。最近、『能楽ジャーナル』に八嶌正治さんが一昨年の名古屋であった中世文学会での飯塚恵理人さんの《井筒》の研究発表について寄稿されていました。伊藤正義・堀口康生・八嶌正治・西村聡といった研究者の《井筒》論をめぐる一文ですが、私にはそこにも鮮明にこの二つの問題が現われているように思えました。

以上が私の感想ですが、重箱ならぬ三宅さんの本の隅（千分の一くらい）をつついたような感想で申し訳ないと思います。けれども、能の作品研究にとっては大事な問題であることは理解していただけると思います。あまり礼状らしくない文面になりましたが、どこからか書評を頼まれたら、やはりこんな形で書くことになるだろうと思います。

（一九九五・九　草思社　A6判　二五四頁　二五〇〇円）

新刊紹介

小野恭靖著『中世歌謡の文学的研究』

本書は、中世歌謡の文芸的視座からの研究を精力的に続けている著者の第一論文集である。著者自身が「序説」で概説している中世歌謡史に基づき、今様雑芸から中世小歌までの中世歌謡に関する論考が合計二十七編収録されている。全体は三部から構成されており、その内容を列記すると以下のとおりである。第一部今様及び周辺歌謡研究―第一章『梁塵秘抄』研究・第二章田歌歌謡研究・第三章仏教歌謡研究、第二部朗詠・五節間郢曲研究―第一章朗詠譜本研究・第二章五節間郢曲研究、第三部中世小歌研究―第一章中世小歌の史的研究・第二章『閑吟集』研究。本書の特色の一つは、膨大な歌謡資料を博捜精査し、歴史的位置付けを試みている点にある。特にその中でも、『朗詠九十首抄』、『朗詠注秘抄』、『五節間郢曲事』等の譜本の伝本研究、そして、「田歌切資料」、「古筆切和讃資料」、「三部仮名抄古筆切」、「伝聖宝・伝法然筆声明切資料」等の、新出資料を多く含む貴重な古筆切資料の書誌学的考察は圧巻である。また、今様及び中世小歌の作品研究では、個々の作品内部の表現の生成・展開について、和歌との関わりという観点から重点的に考察し、多くの新見を提示している。こうした著者の研究姿勢・方法は、著者自身が「序」に於いて「究極的に指向するテーマ」と述べ、また本書の表題ともなっている〝中世歌謡の文学的研究〟と深く関わるものであろう。尚、本書に収録されている論考に続く時代の「隆達節歌謡」に関しては、著者が別の早い時期に第二論文集の上梓を予定しているとのことである。

（平8・2　笠間書院　B5判　五九五頁　一五〇〇〇円）〔酒井茂幸〕

中野三敏著『書誌学談義　江戸の板本』

本書は、「新日本古典文学大系」月報に連載された「板本書誌学談義」に加筆訂正を施して一書となしたものである。著者があとがきで述べられるように、書物を物として見る技術を伝えるべく、第一章「板本というものの性質」から、以下「板式」「書型」「装訂」「分類」「板本の構成要素」「板本の版面」「本文の構成要素」「刊・印・修」「板株・求板」に至るまで、著者の豊富な知見をもとにして、懇切丁寧に記されている。何分実物に触れなければ解らないことの多い江戸の板本であるが、図版が多数掲載されて理解を助けてくれる。中には吉原細見の袋等、珍重すべきものも多く、誠にありがたいことである。完備した索引も付され、書誌学辞典として利用できるよう配慮されており、江戸の板本を取扱うための必携の書であることは間違いない。巻末に付される鈴木俊幸氏の労作「板本書誌学関係文献目録」も有益である。

（平7・12　岩波書店　B6判　三五〇頁　三〇〇〇円）〔二又　淳〕